

研究ノート

## 東日本大震災後の社会変化と宗教者の役割

～仏教の在り方、今宗教者に求められていることは何か～

小林 康 洋

はじめに

一 大震災後の宗教者の役割 いま宗教者に求められているものは何か

「寺門興隆六月号掲載P五八～六五」 鈴木岩弓（東北大学大学院教授、宗教民俗学）

一―一 東日本大震災の以前と以後

～社会的つながりと震災～

一―二 大震災から大震災への変化

一―三 被災地で宗教者は何をした

一―四 心の相談室で分かった課題

二 東日本大震災から見えてきた仏教のありかた

正木晃著「お坊さんのための『仏教入門』」より

おわりに

## はじめに

東日本大震災発生から丸二年が経つ。死者一五、八八三人、行方不明二、六七一人（二〇一三年六月十日警察庁発表）震災関連死も二、六八八人（二〇一三年五月十日復興庁発表三月三十一日現在）という桁違いの犠牲者を出している。

また避難・転居者数は三〇三、五七一人（二〇一三年五月二十日復興庁発表・五月九日現在）避難者数は一五、三〇七人（内訳：避難所一二三人、旅館・ホテル〇人、親族・知人宅等一五、一八四人）転居者数は二八八、二六四人（仮設住宅・公営住宅・民間住宅・病院含む）となっている。一言で「被災地」とくれない、様々に異なる状況が生じており、復旧・復興の取組状況も大きく異なっている。

震災発生よりこれまで、多くの宗教者が個人的・組織的にさまざまな支援活動に従事し、時間の経過とともに種々批判とも激励ともとれる評価がされるようになってきた。

大震災後の宗教者の役割：「いま宗教者に求められていることは何か」（寺門興隆六月号掲載、鈴木岩弓東北大学大学院教授著）や「お坊さんのための『仏教入門』（正木晃著）を取り上げ、震災後の社会の変化やそれに伴う課題を見い出し、これからの支援や事前対策といったことに対して、宗教とりわけ仏教、我々僧侶が果たすべき役割は何かをあらためて考えていきたい。

### 一 大震災後の宗教者の役割　いま宗教者に求められているものは何か

#### 一― 東日本大震災の以前と以後　社会的つながりと震災

震災前、日本の社会がどうであったかといえば、「無縁社会」と呼ばれるように大都市圏を中心として社会的なつ

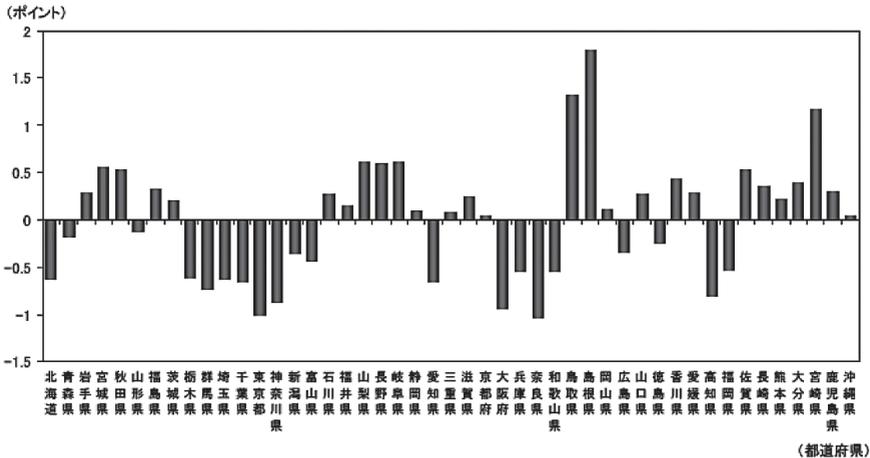
ながりが希薄化しているとされ、家族も地域社会もかつての機能を失ってしまったことが指摘されていたと思う。これに対して、東北地方はこれまで比較的地域のつながりが強いと考えられてきた。大震災を契機に注目を浴びた地域のつながり「ソーシャルキャピタル」の概念は社会の重要な構成要素であるとされる。古いデータ（平成14年）であるが、元々岩手・宮城・福島県は社会のつながりが強い地域であった事が下図より見てとれる。それぞれに地域のポイントを参照いただきたい。

（内閣府の調査・図Ⅱ－四－一 都道府県別のソーシャルキャピタル指数）

実際、多数の人命を救った迅速な避難や被災地での秩序だった行動は世界中から賞賛されたが、それも同地域が社会的つながりを強く残している地域であったからこそ出来たことだと言える。東日本大震災が浮き彫りにしたわが国の抱える問題と、震災によって変わる可能性があるとする「社会的つながり」について再認識する必要があるだろう。

鈴木氏は東日本大震災を契機として浮上してきた、社

図表Ⅱ－４－１ 都道府県別のソーシャルキャピタル指数（試算値）



資料出所：内閣府国民生活局 平成14年度委託調査「ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」において試算されたソーシャルキャピタル指数を掲載。具体的には、委託調査内で行われたアンケート調査結果から、つきあい・交流、信頼、社会参加の3カテゴリーについて指数を作成、それを平均して合成指数を作成している。

会における、さらには社会から期待される宗教者の役割について論じている。まず、現代日本人の意識の実態把握をしようとする社会調査結果から、特に震災前後の人々の意識変化の実態を明らかにすることから分析している。

連合総研（公益財団法人 連合総合生活開発研究所）がおこなった調査（二〇一〇～二〇一二年度経済情勢報告「職場・地域から『絆』の再生を―震災で変わったもの・変わらなかったもの」）から「多くのヒトが震災によって行動を変えている」ことの例として

「一層の節電を行っている人」が五七・二％、

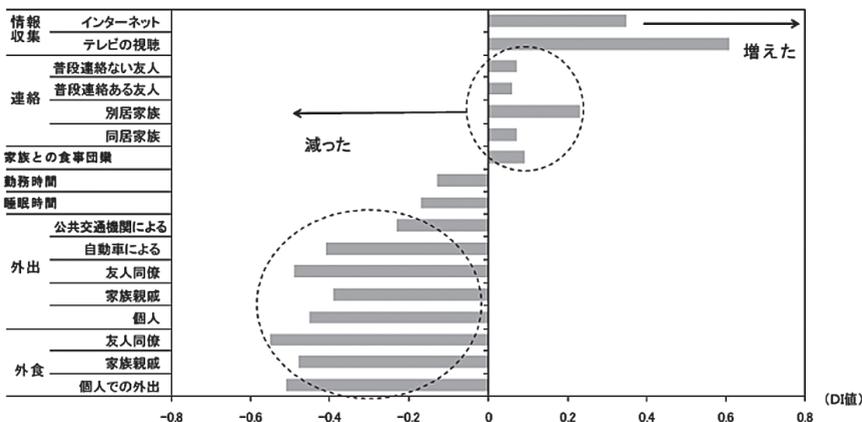
「家族との時間を多くもつ人」が四七・七％増加

「地域の繋がりを重視」も倍増し三五・六％

社会における人と人との結びつきを「前より大切に思う」とする人七九・六％となった。

さらに、こうした震災前後の比較を宗教に特化して検討した意識調査、まず震災から一年余り経った二〇一二年四月から六月に実施された「第十一回学生宗教意識調査報告」（宗教意識調査プロジェクト代表・井上順孝國學院大学教授）では、「災害時に宗教や宗教家にできる役割があるか」との問いに「必ず

図表Ⅱ-4-6 震災後の行動変化（時間の過ごし方）



資料出所：株式会社インテージ「東日本大震災後の生活者の意識と行動調査・第1弾（11年4月）」

ある」「いくらかある」の回答の合計が六七・二％に上り、宗教家や宗教施設の役割としては「避難場所となるスペースの提供」「被災者の心のケア」がそれぞれ五〇％を超えていた。

さらに、この学生対象の調査結果では「人生に悩んだ時相談したい宗教家」について「僧侶」を挙げる回答が一八・三％となり、前回まで一位の「牧師・神父・シスター」（二五・八％）を抜くという結果も明らかにしている。

また日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団が全国の男女千人に行った二〇一二年の意識調査を挙げている。「死に直面した時、宗教は心の支えになるか」との質問に、「なると思う」と回答した人が五四・八％で四年前の三九・八％より一五％も増加し、前は「わからない」の回答が四三・四％と多かったが、震災後は二六・二％と大きく減少し、その結果肯定的な回答が増えたものと考えられている。

震災は人々の意識や行動に相当な影響を及ぼしたのは間違いないが、今後の推移に注意が必要だと思う。

鈴木氏は「今回の震災を契機に支援活動に従事する宗教団体や宗教者の働きが評価されている意味を考える時、他方で一九九五年一月十七日に起こった阪神大震災当時の宗教者の行動を対角線上に想定してみると、時代状況もわかってこよう」として次に比較している。

## 一―二 大震災から大震災への変化

国際宗教研究所主催のシンポジウム・テーマ「阪神大震災が宗教者に投げかけたもの」一九九五年十月八日京都私学会館、記録『阪神大震災と宗教』（東方出版、一九九六年）でコメンテーターを務めた山折哲雄氏の発言を引用して、

……宗教教団も大変な救援活動を展開されていたわけですね。しかし、それをそのまま、マスコミの眼差しは宗

教者としての活動とは必ずしも認めていなかった。このギャップの問題が非常に大きいと思いますね。そのマスクミ報道を支えていたのは実は日本国民の眼差しでもあった。おそらく日本国民が被災地における宗教者の活動における独自性を認めようとはしていなかったということですね。（八七頁）

それだけ日本の社会が世俗化してしまったということではないでしょうか。あるいは日本人が宗教者を信用していないってことの表れでしょう。（八八頁）

鈴木氏は、その背景には周知のごとく、一九九五年は、オウム真理教にかかわる三大事件の最後、地下鉄サリン事件が起こった年で、オウム真理教に対する疑惑の眼は一般の人々にとっては宗教全般に対する連なった眼となって広まっていたことを指摘する。

山折氏の「単なるボランティアと何が違うのか」「宗教者として何をしていたのか」といった批判、今年（平成二十五年）三月二日、東北大学でのパネルディスカッション（東日本大震災と宗教者・宗教学者）の基調講演で、また阪神大震災時の惨状をみて直観した「無常」「地獄」といった宗教的言語が、当時の日本社会に通じることがなく、宗教が世俗化の底をさまよっているといった感じがあったのだということを挙げている。しかし今回の震災においては「無常」「地獄」といった宗教的言語がメディアにも取り上げられ、世論においても語られるようになったという現実があり、そこにかすかな「希望の灯」を見出した山折氏は「阪神淡路から三・一一にかけての時間の落差のようなものは一挙に乗り越えられてきたのかな」と不安を持ちながらも感じたことを挙げている。

### 一三 被災地で宗教者は何をした

鈴木氏は、宗教者の被災者支援を、時間の経過とともに力点のおかれる支援目的に変化があったことを整理している。(六一～六三頁)

まず震災直後の最初期というのは、避難所の設置や水・食料などの救援物資の搬送、そして被害状況の把握といった、主に「生者の今」の救済にかかわる事柄が併行して行われる。……こうした生者を対象とした支援活動に若干遅れて登場したのが、「読経ボランティア」と呼ばれる。死者を対象とした弔いの活動である。

四十九日にあたる四月二十八日を迎える頃になると、瓦礫処理を中心とした地域の家々の片付けが、宗教団体以外のボランティアと共に盛んに行われるようになった。……この頃から道路の状況も多少改善されて被災地に入るとも容易になってきたが、宗教者の活動としては、(略)物資支援などに加えて、宗教者の特質を生かした活動が顕著になってきた。……「足湯」などといったリラククスできる時空間を設定し、……被災者に寄り添ってその話じっくりと聞く「心のケア」の試みも、被災地がある程度安定してきた中でなされるようになった。

つまり、宗教者によって様々になされた被災者支援の中にはまず、「物資提供」「住宅提供」「資金援助」「健康維持」といった宗教者以外のボランティア活動でも行われているものが見られた。しかしそれに加えて、読経や慰霊といった「死」の領域とかかわる、宗教者ならではの特質を活かした「宗教的支援」が、そうした支援内容と併行して行われていた。この点は、時代の影響もあって自制せざるを得なかった阪神大震災時の宗教者の立場と比べ、大きな違いであったといえよう。

と述べている。

#### 一四 心の相談室で分かった課題

鈴木氏も運営に携わっている〈心の相談室〉において述べているが、この組織は仙台を拠点に誕生した宗教者による支援の集まりであるが、他の団体と異なる大きな特徴は、仏教・神道・キリスト教・諸教など様々な宗教者が宗派を超えて活動を協働しており、そうした宗教者たちを、医者や宗教学者が支えている点であるという。「読経ボランティア」の活動に始まり、震災犠牲者の弔いと残された人々のグリーフ・ケアといった宗教者ならではの「死」の問題、遺族に対する包括的な支援を目指しているという。そのなかで、宗教的背景の異なる被災者に対する宗教的ケアはいかになすべきか？宗教者が自己の宗教の布教ではなく、超宗派超宗教的に宗教ケアを行うことはどうすれば可能か？といった課題がでてきたということ。そこで東北大学で「臨床宗教師」の養成講座を設け、宗教宗派を超えた形に宗教的ケアを行うことのできる専門職の養成を目指すこととなる。

この超宗派超宗教的ということも、今後の我々日蓮宗の課題と成り得るのではないか。

### 二 東日本大震災から見えてきた仏教のありかた

正木晃著『お坊さんのための「仏教入門」』より

「結論めいたことを申し上げると、僧侶でなくてもできることと、僧侶でなければできないことの区別をちゃんとつけないといけないということです。……僧侶に対して求められたことの第一は、**死者供養**でした。さらに突き詰めると、「鎮魂」と「供養」と「回向」、とりわけ鎮魂だったのです。」(九九頁・太字は筆者)

「では「鎮魂」と「供養」と「回向」は、どう異なるのか。この点については、第一生命経済研究所主任研究員の小谷みどりさんが、上手な説明をしています。……「鎮魂」は、マイナスの極に沈んでいる死者の靈魂を、プラスマイナゼロにすること。プラスマイナスのものを持ち上げて、さらにプラスにするのが「供養」であり「回向」だと

いうのです。」(九九頁)

「そして今回の大震災ではつきりわかってきたことは、「供養」「回向」ができる僧侶はそこそこいても、「鎮魂」ができる僧侶は稀にしかいない事実です。つまり、マイナスの極に沈んでいるものをプラマイゼロまで引き上げるのは、とてつもない力量が必要だということです。」(二〇〇頁)

「今回の大震災の被災地では、鎮魂とともに、説教の力もクローズアップされました。「説教をしてほしい!」「よい話を聞きたい」という要望が、たくさんあったのです。というより、まさに想定外の多さだったのです。……それができる僧侶がまことに少ない。私が知っている範囲でも、「お話をしてください」と頼まれても、自信がないものですから、「あんたやれよ」「お前やれよ」で譲りあって、何も話ができずに帰ってきたという、まことに情けない結果が多かったのです。……鎮魂に力を発揮した、いわゆる祈禱が得意な宗派は、おおむね説教にはよい結果がでなかったようです。反対に、祈禱をしない、というより、祈禱できない宗派、ありていにいってしまえば、説教の領域では、東北地方にはあまり多くないはずの浄土真宗が圧勝でした。」(一一八〜一一九頁・太字は筆者)

「さらに重要な教訓も生まれました。それは、僧侶でなければできないことと、僧侶でなくてもできることの、ちがいというか、区別というか、ともかくも、そのあたりをきちんと受けとめなければならぬということです。……僧侶の大半は、瓦礫除去とか、後片付けとか、そのてのことができるかなと思って、出かけたようです。……ところが、現場で求められたのは、鎮魂であり、供養であり、説教だったのです。……でも、そんなことは想定していなかったのです。だから、とまどってしまって、結局は何もできずに終わった例が少なくありませんでした。この点は、真摯に反省する必要があります。いまさら指摘するまでもなく、鎮魂・供養・回向・説教などは、僧侶の基本です。この原点は絶対に忘れてはならないのです。」(一二〇〜一二二頁)

という何とも耳が痛い話である我々は受け止めなければならぬだろう。

鎮魂・供養・回向の分類や解釈には疑義があるが、説教なども含めて僧侶なら誰でも卒なくこなせるといったイメージがあるもの。実際には、被災地においてそのニーズに応えられなかったのは反省すべき点であろう。

正木氏の言うとおり僧侶でなければできないこと、特に説教といったことは、普段仏事で慣れているはずだが、果たして被災地で要望された場合に即座に対応できるか否か、僧侶の資質に関わる問題である。「僧侶でなくてもできること」も継続的に支援として行うことによって「つながり」を保つことも重要だと考えられる。そして「僧侶でなければできないこと」の実行に備えて、また繋げていくしかないだろう。

## おわりに

東日本大震災に遭遇して我々日本人の意識・心理も劇的に変化を遂げたが、被災地・被災された方々は、いま現在も震災からの復興に歩を進めている。

また首都直下型地震や南海トラフ巨大地震の被害想定が発表されたり、本宗でも平成二十四年度宗勢調査のなかで、自然災害への対応についての項目も含まれるなど、もはや無関心でいられる筈はない。

物質的な防災・減災事前対策も当然必要だが、我々宗教者は素朴に、社会的つながりを維持するための活動として何をしていくべきかを考えるべきではないか。

都市圏においても意識的にコミュニティ作りの取組みを進めていくことが必要であるが、今回の被災地のような濃密な地域社会を大都市圏にそのまま実現しようというのは現実的ではないし、望むべきものではないだろう。しかし、不安感への対応や震災という危機に対して、宗門、寺院、一教師、一教師、一個人と区別して、できることを模索し続けていかねばと考えている。

《参考文献》

- ・全国の避難者等の数 平成二十五年五月二十日復興庁発表資料
- ・月刊寺門興隆六月号 「いま宗教者に求められているものは何か」 五八～六五頁
- ・鈴木岩弓（東北大学大学院教授、宗教民俗学） 興山社 平成二五年六月一日発行
- ・職場・地域から『絆』の再生を 二〇一〇～二〇一一年度経済情勢報告
- ・公益財団法人 連合総合生活開発研究所 二〇一一年十月二十四日発行
- ・お坊さんのための「仏教入門」 正木晃著 春秋社 二〇一三年一月二十一日発行